
ハルミチル

ねむこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルミチル

【Zコード】

Z6659M

【作者名】

ねむ二

【あらすじ】

架空の動物、とくに竜が異常なほど大好きな花山 満（はなやまみちる・25歳）は寝返りをうつたところでどこかに落ちた。そこはあたりを氷に閉ざされた洞窟だた・・・のだが、そんなことは満の目には映っていなかつた。氷の洞窟で満が出会つたのは一匹の竜。これは一匹の寂しがりやの竜と、そんな竜を溺愛する一人の人間の物語。（R15は一応の保険です） 不定期更新です

00 主人公紹介

花山 満（はなやま みちる）

25歳。黒髪黒目。身長は160センチ。
体型は一般的で標準体重内。胸がやや大きい。
髪は背中の中ほどまでの長さがあるストレート。
服装はパジャマ。色はやや暗めの赤で、長袖長ズボンの上下でお揃

いのパジャマ。

ボタンと縁取りは赤と白のチョックで少しおしゃれに仕上がっている。
裸足。

下着はパンツとなぜか実用的ブラを着用していた。勝負下着が良かつたと思っている。

元の世界と竜を天秤にかけることすらせず、迷いなく竜を選べる
思いきりのよさのある女性。

01 じつはパジャマ姿（前書き）

初心者です。よろしくおねがいします。

01 じつはパジャマ姿

王は言ひ。

あれを目覚めさせんはならぬと。

民は言ひ。

あれは御伽噺なのだと。

アルフラー・レン聖王国の背後に聳えるカレース山脈。
そこに連なる最も険しき雄峰口フリア。

遠目にわかる万年雪と決して溶けない氷に守られたさりにその奥。

水晶の夢を抱き、あれは今も静かに眠り続けているといふ。

断ち切つてはならない鎖。

受け継がれる玉座と一つの真実。

そして王子は知つた。

あれはまだそこにあつたのだ、と。

びたん！

そう、たしかに“びたん！”と音がしましたよ、私の体。
しばらく痛みに耐えるようにじっとしていたけど、痛みが少し治ま
ると今度は丸まりたくなってきた。

顔（特におでこと鼻）が痛い腕も痛い胸も痛いお腹も痛い太腿も痛
い、そして激しく膝が痛い・・・

なかなか寝つけずベッドの上で寝返りをうつたところに唐突に感じ
たのは浮遊感で。

そして“びたん！”。

何やら平らなもののに、50センチくらいの高さからひっくり伏せで
落とされたよう。

体の前半分に感じる鈍痛を我慢して目を開ける。

これはベッドから落ちたね、と。

だが目の前にあつたのはフローリングの床ではなかった。
白と灰色と藤色がマーブル状の模様になつていて何かつやつやしたもので、ゆっくつ、とてもゆっくりだが・・・模様が・・・動いて
いる。

それはゆうゆうとして、まるで粘度の高い水流のよつな動きだった。

へんな床だと思いながら周りを見ようと、体を少し起こしたところで床の中に何かあるのに気づく。

とても大きいそれは濃い灰色をしていて大きな岩のようごみえる。
半透明の白と灰色と藤色のマーブル越しに間近に見えるそれは、よ

く見れば一つの西洋風ドラゴンの石像だった。

なんでこんなところにあるのかわからなかつたが私の感想はただ一つ。

「・・・かつこい・・・」

そりやもう何がってあの鼻先！あの口まわり！あの顔つき！

一番間近にある眼を閉じた石の龍の顔を舐め回、凝視するように観察する。

うつとりしそぎて鼻血が数滴落ちてしまつてもしようがないと思う。慌てて拭おうとした右手は床を貫通。

ついで体も飲み込まれた。

かなり驚きながらまつさかさまを覚悟したのはたぶん一瞬で、ぬるま湯に浸かっているような不思議な感覚に体を動かすと、その中で泳ぐように移動できることが判明したうえ呼吸も問題ない。

となればやる」とはもあらん・・・

緩む頬を堪えられず、ニヤニヤしつぱなしの顔で竜の石像のもとへ泳いでいく。

べたりと触れた鼻先は石ゆえかやはつ硬く、くくんくんと匂いを嗅いでも特にこれといってしなかつた。

それにしてもこの大きさは圧巻だ。

両手両足を広げてへばりついてみても、竜の石像の鼻面にヒトデのよに張り付いているだけにしかならない。

直に触れてわかつたことは、表面が磨かれたようになつねつやつやだつたこと。

とても肌触りがよく、少しひんやりしているけど頬擦りしても冷たすぎずとても気持ちがいい。

あまりの気持ちよさに再びひつとつとしながら、ぬづけばちゅーを

してビヤくセに紛れてペロリと舐めていた。

うん、味はしなかった。

例えるなら、きれいに洗つて乾かしたガラスのコップを舐めたような感触？

またしてもあちこちとすりすりしていたのだが、不意に顔を上げて違和感を感じた。

・・・あれ？ 眼つて開いてたつけ？

縦長の瞳孔は黒く、瞳の色は青いような緑のような深みのある色。じっと見つめていると、ふひゅーといふ音とともに脇腹に風を感じ・

・・あー、これはもしや鼻息なのでは？

そのまま田を逸らせずにいる先で、縦長の瞳孔がきゅっと狭まり眼を細めて・・・ものすじく、見られている・・・

そういうば表面の色も石のような濃い灰色ではなく、いつのまにか淡い銀に薄い藤色が鱗の端々にグラデーションで入っているような色に変わつて・・・

・・・えーと、どうしよう?と迷う間も、手は確実に竜の鼻先をなでなでしていたのだった。

01 じつはパジャマ姿（後書き）

「うわーまだ読んでいたいがとんでもない」と、おまけで読んでしまった。

「私、花山 満。姓が花山で名が満、よひじくね？あなたのお名前は？」

地面というか淡い紫銀に煌く竜の足元に下りて、見上げながらこやかに尋ねる。

あの痛みが夢なものか。

このステキ竜を夢で終わらせてはならん！

どちらが本音かはひとまづ置いといで、そりと好意を前面に押し出した笑顔で見上げつづける。

愛称は必須だとして。

どこまでなら触つていいの？

年齢差は気にする？

と、そこまで考えてハツと我に返る。

もしこの竜が誰かのペット、もしくはパートナーがいた場合、私はどうすればいい？まさかのお世話係り？

想像だけで徐々に落ち込んでいく気持ちが顔に出たのかもしれない。大きな体が僅かに身じろぎすると柔らかいけれど焦りを含んだような声が上から聞こえた。

いや、聞こえたというよりは響いた感じだったけど。

『まつ、まく、そういうのまだで・・・だ、だからあの・・・』

「…」これは名前をつけていにこつてことね…むしろつかれることね

…

一人称がぼくとこう」とと口調からみてこの子はまだ若いに違いない！

そのうえ男の子っぽいし…よーしよし…！幸先いいわ！

どうやら産まれたてというわけではなさそうだけれど、名前がまだないなら愛を込めたものを一発やつとくべき、いいえ是非ともやらねば！

見た目はキラキラしてて落ち着いた淡い輝きを放つていて、瞳の色合いも南の海のようだとつてもきれい。

よし、決めた！

ただでさえ見つめていた目をさらに見開き、大きく頷くとすりと息を吸い込む。

「あなたの名前はハルミー春の口差しのような体の色と海のような瞳の色から春の海と書いてハルミー。

ちなみに愛称はハルよ？私の国っぽい名前になっちゃったけど…・どう、かしら？」

こんなにかっこいいに竜なんだからもつと長い名前のほうが良かつたのかもしれないけど…・・・たぶん私が覚えられない。

それになんだか“春”とついてるほうが可愛く育ちそつて自分で自分の中でポイントは高い。

そして“海”でワイルドさをプラス。かっこかわいくて、ちょっとワイルド。

いい・・・！

なんかすげくイイ…！

若干ひいてるよに見えるけど何かあったのかしら？

ハツ！もしかして気に入らない！？
どう断るつか悩んでいるとか？

またしてもどんよりしあじめたときだった。

『春の、海・・・ハルミ、ぼくの、名前・・・きれいな名前をあり
がとう、ミチル・・・』

・・・ほほえんだ。

絶対、ほほえんだ。

全世界の人が表情は変わったと言つたとしても私には見えた。
目の前のハルがかわいらしくほほえんだのだ！

うかつ！

せめて恋人がいるかきいてからにすればよかつた。
これでハルに恋人がいたら私、終わりじやん。

心の準備もできなかつたよ。

よよと泣き崩れる間も惜しく、引き攣つた頬をなんとか動かす。

「は、ハルは、その、こつ、恋人とか、パートナーとか、ご主人様
とか・・・どつかに、いる？」

たぶん私の顔色は悪い。それも相当。

異常なほどの速さと大きな音で心臓がドクドクいつてる。

そんな私を不思議そうに見下ろして、ハルが小さく首を傾げる。

くつ・・・追い討ちをかけるような仕草は今は遠慮してほしいのだ
けど・・・

ぎゅっと拳を握った私に、ハルはふるふると首を振ると「いないよ
？」と寂しそうにほほえんだのだった。

「一年ぶりか・・・」

腰掛けっていた椅子から一人の男がゆっくりと立ち上がる。
睨みつけるように見下ろした視線の先には、一糸乱れぬ隊列を組んでいる黒い騎士鎧を纏つたものたちと、少し離れて並ぶ黒いローブ姿の一列があり男はただ静かに瞑目する。
やがてそこへ向かうために自らも黒いマントを羽織ると、靴音も高く前へと進んだ。

受け継がれる玉座。

終わらない鎮。

伝え続けられる一つの真実。

あの日。

先王が玉座を退く前日。

先王の言葉に現王は絶句した。

それは王にのみもたらされる驚くべき真実。

しかし現王は武に疎く、どちらかといえば政に向いていなかったといえる

ような男だった。

あれに武など関係ない。

頭ではわかついていても現王は耐えられず息子に漏らしてしまつ。息子は文武に優れ、またものごとを冷静にみるひとのできる若者だつた。

民からも慕われ、その甘い容姿に多くのものが憧れる。

さらりとした金髪、理知的な青い瞳。

名をルシオン＝クエスト＝アルフラー＝レン。

アルフラー＝レン聖王国の第一王子にして次の王となることが既に定められた運命の王子。

伝えられたのは一つの真実。

それは断ち切れない鎖。

永劫の枷となる玉座。

黒いマントを払い、ルシオンは居並ぶものたちを見渡した。

「これより、ロフリアの頂にある氷の洞に向かい、古代種封印結界の修復と更なる補強を行つ。

みなのもの、世界を滅ぼしたくなくば氣を引き締めてあたれ！」

「「「はつーーー」」

一瞬で誰もが死を覚悟したよつて空気が重くなる。

その背に負つたのは世界の命運ともいえるもの。しぐれば世界が滅ぶ。

いや、消えてしまうかもしない。

一行がただならぬ空氣をまとつて向かう先はロフリアの頂上近くと結ばれている転移陣。

アルフラー・レン王宮の奥の奥、その奥庭にある転移陣への階段をのぼる息子を見つめて、現王は一人ため息を吐く。

今年も息子たちが無事に戻つてくるように女神に祈りながら。

転移陣の紋様に沿つて淡く輝いていた緑色の光がゆっくりと消える。ルシオンと騎士たちは、転移陣の階段を数段下りて洞窟の凍りついた床に立つと周囲に視線を走らせた。

もう一度あたりを見回し小さく頷くと、背後に控えていた魔術師たちが階段を下りはじめる。

手狭な洞窟は転移陣が機能するだけの広さだった。

入り口の天井には氷柱が何本も生え、床は厚い氷と化している。おかげでごつごつした岩場を歩くような不便さは解消されたが、あまり長居をしたい場所ではなかつた。

「予定通り黒竜騎士団のうち、お前たち五名はここに残り転移陣を守れ。

他のものはオレとともに古代種のもとへ向かう! いいか! ぐれぐれも気は抜くなよ! !

「「「はつーーー」「」」

ロフリアの頂まではもうしばらくかかる。

幸いここには古代種が封印されているためか魔物も出ない。あるとすれば雪崩くらいで そのとき、ゴオオオという低い地響きのような音とともに転移陣のある洞窟の入り口が雪に埋もれた。

「・・・・・」

あたりに沈黙が落ちる。

ルシオンは僅かに俯き小さく舌打ちをした。

今日は一年に一度の古代種を封印している結界を修復しなおす重要な日。

日程をずらすこともできず、今日でなければならなかつた。
この国が、王たちが500年近く続けてきたものを、ここで終わらせるわけにはいかない。

これが失敗すれば待つているのは世界の破滅。

その命運を前に魔術師の魔力を無駄に消費するわけにはいかないが、ここに留まつてもいられないと判断したルシオンは魔術師に小さな明かりを灯させた。

なるべくあれの存在を知られたくはない以上、よほどのことがないかぎり王都へ戻つて援軍を求めるることはできない。

今日ここに連れてきたのは古代種の存在を知る「」一部のものたち。実力も信頼も十分に兼ね備えた精銳中の精銳。

魔術師の灯した明かりの中、他の騎士同様自らも剣の鞘を使い雪を掘り出していく。

瞬く間に入り口近くは雪の小山ができ、防寒用の厚い手袋は重くなつた。

初めて古代種を見たあの日。

父王がともに来てくれと、本来ならば知り得なかつた真実を知つた日。

一言で言えば衝撃だつた。

今まで御伽噺と思っていた存在がそこに在つたこと。
その大きさも。

天井が高いはずの城の三階あたりを見上げるほどの中体。

そして石化してなおその身にまとう威圧するかのような濃密な魔力。近づくことさえ憚られるその重圧に、我知らず一步さがっていた。

そんな水晶と氷に守られし、石化した古代種を包んでいるのは古の魔術師たちが施したとされる頑強な結界。

それは白とも灰とも紫ともいえる、だが混じりあうことのない色をした不思議な結界だつた。

その結界は、石化した古代種を碎こうとした十一代前の王の精銳揃いの魔術師たちの攻撃すら凌いだという。

以来、無理に傷つけて目覚められるよりは、と、結界を張りそれを強化し続ける道をとることになった。

雪を掘り進めながら少し過去に浸つていたルシオンが一筋の風を感じ、顔を上げた先には僅かに太陽の光がのぞく。

あれを悪意あるものに利用させないためには今までと同じようにこれからも隠し続けるしかなかつた。

よつしやー。」これはもはや美味しくいただいてくれといつてるような展開ではないのか？

ハルに隠れてガツツポーズをとると、できるだけ真面目な表情をつくる。

「ハル、よく聞いてね？私この世界の人間じゃないの。これは確信があるから絶対よ。

つまり私はこの世界でたつた一人ぼっちの異世界人なの。

そんな私だけど、私ハルと友達、いいえ、それ以上の関係になりたい・・・ハル？どうして丸まるの？
ま、まさか私のこと嫌い？？それとも異世界人だからやつぱり気持ち悪いの？？」

ああ、言つて悲しくなつてきた。

いくら竜でも未知の生物とは距離をおきたいと思つかもしれない。年若いハルならなおさら・・・

丸まるハルに背を向け、しゃがみこむと右足の横にのの字を書く。でもこれのの字になつていないと思つ。
丸を5回くらいなぞつたところで、ハルの苦渋に満ちた声に振り返る。

『じめん、ミチル・・・』

やつぱりか・・・

いいんだいいんだー・・・ハルじゃない竜探して脅してペットにして

『ぼくのせい』ミチルは、もう・・・家に帰れない・・・』

遠い目で何もないところを蹴っていた足を止める。

いま、なんて？

帰れない？家に？誰のせい？ハルのせい？

「ハール？責任、とつてくれるよね？」

うふ、うふふふふふ・・・

口元に力を入れても怪しい笑いは消せなかつた。

人生初のプロポーズがこんな顔ではハルも嫌だろ？！。笑うならもつとかわいく笑つて言いたかつた。

『せ、責任？そりやぼくだつてできればミチルを元の世界に帰してあげたいけど、ぼく一人の力じゃ無理なんだ。ごめんね、ミチル、ぼくがもつと・・・』

しょんぼり落ち込んだハルの足にそつとふれる。

「違うよ、ハル。私が言つたのはハルが私の恋人になつて結婚して夫になつて一緒に幸せな家庭を築いていこうつて話。もちろんハルが私を好きになつてくれるよう努めはするしたまに脅すけど当然最初の目標は両想いになることよ？」

少しひんやりする鱗にへばりつきながら頬擦りする。
きつとハルはお人好しなんだと思つてた。

石から竜になつたときにすら顔から追い払つたり噛み付いたりの攻撃しなかつたんだから。

そのうえ“自分のせい”なんて私に言ひやつた日にはもうツケコマレルに決まってるのに。

わたしに。

ふつふつふ・・・

やはりこれは美味しいただいてくれといつてている展開だったようだ。

あと一押しで近い将来の恋人＆夫が手に入る。

しかもとっても素敵で性格も良い非のつけのない彼が！

・・・それにしても出会つて半時間も経つてないのにプロポーズか・

・我ながら天晴れである。

ハツ！ そういうえばまだOKもらつてなかつた！！
浮かれるのはOKもつたその後だよ！ バカ！！
くるりとハルを見上げてにんまりとほほえむ。

「あハル、誓いのキスよ！」

03・5 ハルのムカシヒマ（ハル）（視点）

あれからどれくらい経つただろう

溶けない氷と水晶に囲まれた小さな世界でいつも思う

あれから世界は少しは変わつただろ？

どんなふうに変わつただろ？

あれからたまに人間が来るよになつた

年に一度と言つていたからしばらく数えていたけれど
特に興味も湧かず一桁もないうちにやめてしまった

やつてくる人間から向けられる感情の種類はとても少ない

恐怖と憎悪

それは当然で仕方ないとも思つ

あれを引き起こしたのはぼくの一族だから

人間たちはまづが口となつて思考も止まつてゐると思つてゐる

ひやひやと話をして、結界を修正し時々強化していく

そんな結界あつてもなべくとも同じなのには

ほよつと思えばこつでも出られる脆弱な結界

少しいじれば結界を壊さずに素通りできるかもしだれない

だからこそこそのはまづの意志

いじから出ても一体何をすればいいのかわからないから

ぼくと同じものはもうこない

ぼくに触れるものももうこない

ぼくと同じものもあるものがもうこない

世界はこんなに 暗くて 寂しくて 冷たい

今度きた人間は一人だつた

今まで最低でも十人はきていたのに

一人できた人間は変な人間だつた

ぼくに対する負の感情が微塵もなかつた

あるいは純粹な好意だけ

それも今まで感じたこともないくらい深くて大きなもの

少しだけ、近くにきてほしかつた

少しでいいからふれてほしかつた

人間たちの張つた結界をどうやつて越えたのかわからなかつたけど
ぼくの周りにある竜膜はたぶん破れないだろうから、小さく穴をあ
けて少し広げてみた

一人できた人間はやはり変な人間だつた

いきなりのこともぼくを畏れず、ぺたぺたと触れて、撫でて、キ
スをして・・・・なめた

人間が、

ぼくを、

なめた

あまりの驚きに息を吹き返してしまったのは
いくらぼくでも仕方がないと思つ

『・・・キス？キスならさつきしたよ~。』

とても不思議そつな顔で首を傾げるハルに、それとのさせ違ひと言いかけて留まる。

・・・わっかのちゅーバレていたのか。
だが問題はそこではなかつた。
ハルは勘違いしている。

本来なじりこいでやせし乍ら正してあげるのが良心といつものだね。

ニヤニ。

「ハル、念のため、もう一度、しつこいつ？」

一言一言区切つて強調する。

につじり笑つておいでおいでと手招きする。

その手に誘われるよつて長めの首を上げてくるハルに泳いで近づいていく。

ハルの鼻先をなでなでしながら上唇と思われるあたりにしつこつする。

ちゅつとした瞬間、たしかにハルは照れていた。

なんだかもじもじして瞳が潤んでいるハルは国宝級だと思つ。いいや、國すら超えたね。

世界の宝だ。

そこでふと気づいた。

この純粋培養純真無垢なハルがよく今まで無事だったなと思つと同時に、この純粋培養純真無垢なハルを数多の魔の手から守るのは私の役目ではないのかと。

ハルをなでなですりすりしながら、この大きな体ではどこへ出かけるにしても100%目立つと思う。

近所のスーパーに買い物にもいややしない。

それにこの色。

どこの悪代官に田をつけられて攫われるとも限らないのだ。

そして夜といわば寝といわばあんなことやそんなことを・・・！

許せん！断じて許せん！！それをしていいのは私だけだ！！

悪代官お前は引つ込んでろ！お前には指一本ふれさせん！！

頭の中で悪代官を撃退してから、ハルの瞳を見つめる。

「ねえ、ハルは私より少し大きいけど、もう少し小さくなったりはできないの？」

こういうふうにハルを抱っこして散歩とかもしたいんだけど・・・」

「

誰かに攫われないためには最終服の中に隠すこととも考える。

服の胸元から顔を出してるハル・・・うつ！かわいすぎる！！

ちょっと鼻息が荒くなってしまったが、どうにか心を落ち着ける。

少し考えていたようなハルの体がゆらりとかすむと、お座りして40センチくらい（しつぽ除く）の縫いぐるみサイズのハルが・・・ごくん・・・

凝視してくる間どつやら息を止めていたようで、大きく一呼吸する

ヒサツとハルの両脇に両手を差し入れ目の前につねてくれる。

「ちゅうじごくりごくりとつと見つめてからゆうべつ抱き締めた。

「・・・苦しくない?」

ドキドキしながら尋ねるとハルがふるふると首を振る。
うひや、ぐすぐつた! でも我慢!

『ぼくの体はこの大きさでも人間には傷一つつけられないから・・・
だから、安心して好きにしていいよ?』

ぶつ! -

あ、危ない危ない・・・

そんな好きにしていいなんてそんな気軽に、えつ、あ、ちょ、ほん
とに?

・・・だめだ!!

ハルはたぶん力の込め加減についてのみ言つてくれたに違いないの
にいきなりそんなことしたらハルに嫌われてしまう。

もう少し、もう少しの我慢よ・・・

両想いになつたら必ず・・・必ず・・・

・・・ちゅ。

ああっ! くりくりした瞳の誘惑に負けてしまった・・・!

こつなつたら我慢なんて無理! 無駄! 無視!

ハルのおでこに再びちゅつとしてなでなですりすりしまくる。
あー、このフイット感もたまんない。

なんでこんなにぴったりなんだろ？と思つて少し硬いハルの抱き心地は最高。

西洋風ドラゴンの宿命、お腹ぽつ一つも少し控えめなハルは思つていたより軽かつた。

これなら服の中から顔を出すハルができる。してみせる。

・・・服の中から顔を出したハルがこっちを見上げて小首を傾げる、なんて・・・

くーっ！こりやたまんないね！！

自分の想像にでれんでれんしながら、ハルの背中やしつぽを撫でているとくいくいとパジャマを引っ張られた。

ん？と腕の中を見ればどいか恥ずかしそうにもじもじしているハルがいた。

これもまたよし！－

少々鼻息が荒くなつてしまつたが、ハルは俯いていたので氣づかれていらない・・・と思いたい。

そんなハルがちらつと上目遣いで田を合わせると両手の爪先同士をつんつんして・・・

だめ、鼻血出そう・・・！

でも今そんなのを見せればハルはドン引きするかも知れない。
気合だ！氣合を入れろ！氣合でのりきるんだ！
いや、氣合じゃダメだ！ここは深呼吸だ！！

す――は――と意識して深呼吸を繰り返すと、いくらか治まつた気がある。

よし。ミシ ハラ ハランブリー！

少し氣を紛らわせるために考えた内容は、この後無残にも打ち碎か

れぬためとなる。

05 ハルのおねだり（前書き）

ご注意ください
相手は竜ですが、たぶんR12くらいだと思います。

05 ハルのおねだり

ミチルはコンパートをれなかつた。

そして 私のパジャマは血に濡れた。

ハルの凶悪な一言によつて。

もじもじとしたハルが、うるいると潤んだ瞳で恥ずかしさに駆く。

『……あのね、えつとね……？』

あらつあらつと田を合わせては視線を下げるといつ大サービスつきで。

当然その様を記憶に焼き付けるよつてじつと凝視し、瞬きする」とすら最小限にした。

『さつきみたいに、えと、ミチルに……なめてほしい、な……』

できる?してぐれむ?とその海色の瞳からひしひしと伝わつてくる。

それは“おねだり”と分類されるものだった。

無論、私の鼻は血を噴いた。当たり前だ…どこで覚えたんだそんなこと…！

無意識に顔をそらして鼻血をハルにかけるのは阻止できたが、私の左肩は悲惨だった。

ただでさえやや暗かつた赤が、今は黒くさえなつていつに見える。

もういい、ついでだと右肩で鼻血の残りを拭いた。

ほんとに舐めていいのか、いいんだね？ハルがお願ひしたんだよ？

ふつ、ふつふつふつふつふ…！天は我に味方せり！！

荒ぶる鼻息をじつにか押さえつけ、ハルの体を持ち直す。

抱き締めていた体勢から、脇の下に手を入れて持ち上げた体勢に。明らかに期待をこめて見上げる瞳が甘く揺れている。

どきどきしそぎて手のひらが汗ばむ。

そつとハルを引き寄せ、ほっぺに口を近づけた。

そしてぺろんと舐める。

じっくりハルの様子を観察しながら。

『ひつひつ…』

短い悲鳴のようなものをあげて、ぎゅっと目を瞑り、一瞬全身を硬直させるとすぐにしつぽを振りまくる。

ぶんぶんと左右に振れるしつぽはけつこう速い。

どうだった？と目で問いかければ、ハルは嬉しそうに期待に満ちた目を向けてくる。

その間も振れるしつぽと表情で言いたいことは十分にわかっていた。

「どうしたい？」

答えなんてわかつてていたけど。

その問いにハルは俯いて、ビクビクとでも迷つてこるようだつた。

『・・・ も、も、もう一回・・・』

かなり恥んだのだろう。少ししてから上げた瞳が泣きやうに潤んでいる。

わざと弓を寄せ、ハルの耳元で囁いた。

「もう一回、ビクしたいの？」

『も、もう一回、なめて・・・』

とひつもなく恥ずかしいことを口にするよつて、ハルは今にも消えそうな声でそう言った。

自分の口元が笑みに歪むのがはつきりわかる。それでも、ハルがそんな風にお願いをするからよ~と念を押して、もう一度、今度はハルの首を舐める。

ねつとつと。

『・・・ も、もう一回・・・』

今度は甘ったるい可愛い声でハルは鳴いた。

ハルの海色の瞳が細まり、腕を縮めて手が握り締められている。

長いしっぽがぴんと伸びて、小さな牙ののぞく口が少し開いたまま
だった。

手の中でふるふるとわずかに震えて何かに耐えるようなハルを見て、
ごろんごろん身悶えたいのを懸命に堪える。そしてこの瞬間、心に
誓つた。

ハルを人前では舐めないと。

どこかぼーっとしていたハルが、はっとしたように斜め下を見下ろした。

何かあつたのかと釣られて同じところを見ても何もない。何もないというか、半透明の白と灰色と藤色のマーブルの向こうにあるのは氷に「一」ティングされたような不揃いな壁と床だった。どこが違うのかさえわからないのは、この大きくて丸い空間の外側の様子など記憶の片隅にも残っていないからだ。

ハルを見ればどこか緊張した顔つきでパジャマをきゅっと握っている。

視線は外を向いたままだけど、信頼はここにある。そんな様子にじんわりと嬉しさがこみ上げた。

『ミチル、いまから透過と防音の魔法をかけるから驚かないでね?』

そう言つたハルがこちらに首を伸ばすと、キスをするようにまつべに鼻先をふれさせる。

その瞬間、ハルと私のまわりに一つのシャボン玉のようなものが現れて見えなくなつた。

・・・いまのがハルの魔法。魔法なんて初めて見たけど、とっても可愛いハルの魔法はとっても可愛い。ほっぷにちゅ、でシャボン玉がふわん、なんて。

うふふ」と一人ほのぼのしていたが、ふいに重要なことに気がついた。

ではハルが私以外の他人に魔法を使うときはどうするの? やっぱり

ちゅつなんてしちゃうのか!? 待て！待て待て…！それは許さないよハル！！私以外にそんな魔法を使わないで…！

ハルの脇に差し入れた両手の指先に力が入る。瞬間、どす黒い感情が口から出そうになつた。

『大丈夫だよ？心配しないで。ミチルのことはぼくが守るから。』

振り返つて心配そうに見上げるハルに、それ以上は言えなくなつてしまふ。

答える代わりにハルをなでなでして、ぎゅっと抱き締めた。ハルも短い腕を伸ばして抱きついてくる。ハルが心配してくれてるのはわかつてたけど、いまは顔を見られたくないなかつた。酷い顔をしているに違ひないから。

しばらくすると、遠くからガシャンガシャンと複数の金属がぶつかるような音が聞こえてくる。それは先ほどハルが見ていた方向だつた。何かが近づいてくる。それも威圧的に。まだその影さえ見えなかつたが、ハルの様子からしてそれは近づきたくない相手だと推測できた。

・・・もしかしたらハルをいじめにきたやつかもしれない。ハルに非道いことをしたら許さない！末代まで呪つて祟つてハルに赦しを請わせてやる！できなくともやつてやる。苔の一念砦をも通すのだ！！

さらに近づく物音に、焦る心でハルをさらに抱き締める。

魔法のある世界だ。もしそんなもので攻撃されたらどうじよつ？ま

まだまだ若くて可愛いハルが自分の身を守れるだらうか？無理だ！名前もまだなかつたような幼いハルを守らなくては…！…そう気づいた瞬間、物音のほうに背を向けハルを庇う。

そのときだつた。ドオオン！…という何かが爆発したような音がありに響く。その音を背中で聞き、ぎゅっと皿を瞑るとじっかりとハルを抱き込んだ。できるだけ覆い隠すように。

爆音に気をとられていて、ガシャンガシャンという規則的な音が、思いのほか近くで聞こえたことにドキッとした。冷や汗が流れる。それでも確かめなければならない。

ゆっくりと振り返った先には、黒須くめの歯じー一団がいた。

07 初めての嫉妬といふ仕事（前書き）

「注意ください
相手は竜ですが、たぶんR12くらいだと思います。」

黒尽くめの一団は、怪しげな花丸つき満点の長身軍団だった。しばらく睨みつけていたが、何かし始めの素振りもないのに警戒しながらじっと観察してみる。

他の黒尽くめに比べて割合近くに立つ金髪の男は、地面からやや浮いてる私とあまり変わらない位置に頭頂部があつた。白い息を吐き出すその顔色は少し青白い。顎に汗でも伝ったのか、ぐいと右腕で拭っている。まさかの暑がりなのか？それならそんなマントと鎧なんてはずしてしまえばラクそうなの!。

次に男は遙か上空を見上げて喋りはじめる。同じどこを見てもそこには何もないんだけど？それに男の言葉は聞き取りづらく、強いて言えば意味不明だつた。何かが微妙。と、ここで気づいた。あー、言葉通じないんだ、この人たち。異世界へ来たんだから当然よね。でもそれなら良かつた！ハルとは言葉が通じて！ハルと言葉が通じてなかつたらストーカーになつてたかもしれない。いや、絶対なつてたと思われる。

それにもしても私たちが見えてないはずなのに無視するしハルの部屋壊しといて何様なの？どうやらあいつらは入り口を無理やりつくつて入ってきたようで、さつきまでなかつた入り口もどき周辺には瓦礫と氷の欠片が散乱している。

徐々に大きくなる怒りに、ハルをそつと体から離しその場に浮かばせた。

何か一言言つてやりたくて黒尽くめたちに泳いで近づく。少し近くで見た金髪はまあ美形だった。まさに絵本の中の王子様。ただそん

なものはハルにしたことを思えばこれっぽっちも意味はない。

マーブルの向こうにいる金髪が仲間と何か喋っている。ここまで来て無視とはいは度胸だ。後悔させてやる。

「ちょっとあんたたちねえっ！」

びしつと金髪を指差し、一言とは言わず怒涛の「」とく怒りを吐き出そうとしたところ、腰にあてた左手にぴとつとくつく感触があった。

はつと見下せばうみした海色の瞳が見上げている。

『・・・ミチルは、ミチルはその人間のほうがいいの？・・・ぼくよじっ』

ハルの両手にぎゅっと掴まれた指先に少し力がこめられた。勢いをなくした私の右腕がゆっくり下がる。そんな馬鹿な。ハルよりこの金髪がいいなんて絶対あるわけないのに。

何を勘違いしたのかハルはいまにも泣きそうな顔で胸に縋りつくとぶんぶんと頭を振った。

『いやだ、いやだよミチル！誓いのキスだつてしたのに！お願い、ぼくを捨てないで！』

「ふはあっ！」

再び私の鼻は血を噴いた。今度は右肩が犠牲になつた。

ハルを片手で抱き締めながら残りの鼻血を右袖で拭うと、よしよしと額から後頭部へ向かって何度も撫でる。何に気が動転したのかはわからなかつたが、きっとあいつらのせいだ。

黒尽くめに怨嗟の思いをぶつけていると、私の喉元にあつたハルの頭がもぞりと動いてハルのおでこが首筋に擦り付けられる。

そして

べんと

ハルに、
舐められた。

少しひんせりしたハルの顔は、これまでいたるところに濡れていた。

ねえ 気持ちは?

あたまのJINを
今更ながら思ふ

はあ・・・『んう、ねえ、気持ち良い??・・・ん』、ねえ、ミチルう・・・

舐めることに夢中になりだしたハルに腰が抜けそうだった

気づかれたら最悪だ。ああ！こんな可愛いハルを唆したとか筆絡しとか言われて絶対ハルに嫌われる！それにこんな状況を知らないひとに見られるなんて！こんな状態のハルを見せるなんて！！

そんな中、異常に興奮してきたことに気づいて愕然とした。

それにそのことをハルに気づかれた予感がする。

『ミカル……いつまでもおじさんてる。ミカルせいかあるの、好き?』

ああ！自分でも知らなかつたこんなこと！それならハルにだけは知られたくなかった！！私は変態だ！！

長めの首を起こし、少し上目遣いで見つめるハルに後ろめたい気持ちでそつと頷く。本当は視線を逸らしたかつた。でもそうするとこの後のハルを見逃す。

『良かつた。ぼくもミチルにこうするの、好き。』

照れたようにぐりぐりとおでこを擦り付けたハルが満面の笑みでしつぽを振つて嬉しそうにしている姿は愛くるしい。見逃さなくてよかつた！うん、もう変態でいいや！

頭から背中を撫でると、気持ち良さそうに目を細めたハルが胸にもたれてそこですりすりつとする。そのままの体勢で数秒動かなかつたハルが、下から静かに見上げてきた。

『あのね？あんなことするの初めてだつたから上手くできる自信はなかつたんだ。練習もしてないし・・・でもミチルが離れていくのを止める方法を思いつかなくて・・・』

少ししょんぼりとしたハルの瞳が瞬く間にうるうると潤みだす。

『ねえ、ミチルはぼくのこと、好き？・・・ぼくはミチルの心も体も柔らかくて暖かくて、大好き。』

苦しそうにほほえみ、わずかに首を傾げるハルにそつとキスをして頬擦りする。心の底からの想いをハルにあげたい。目一杯あげたい。断られてもあげたい。

「うん、ハルのこと大好きだよ。ハルの瞳も顔も体も鱗も爪も牙も

角もしつぽも舌も。ハルの全部が可愛くて愛しくて大好きだよ！』

そう答えてもう一度すりすりしてからハルを見る。『これでハルと完全な両想いになれたのだ。湧き上がる喜びで自然と笑みの浮かぶ唇にハルがキスをする。

夢見るようにうつとりとほほえんだハルが、そつと耳元で囁いた。

『・・・ねえミチル。ミチルが望むならぼくはどんなことでもしてあげる。だから・・・ぼくを捨てないで？』

「もちろん絶対捨てないよ。捨てるわけがないよ。ハルがもう嫌つて言つてもお願ひどつか行つてつて泣いて頼んでも捨てないから。それより私のほうこそ捨てないでね？私はきっとしつこいよ？私を捨てたらハルに一生つきまとうし、一生が終わつてもつきまとつよ？人間の寿命は竜より少し短いみたいだから、ハルの後ろにべつたり張り付いて離れてあげないから。」

うふふ、と微笑みストーキングの宣言をした。これで引かれても困るけど、ラブラブな今ならこれくらい釘を刺しておいても大丈夫だと思つ。

目を見開いて、数秒止まつたままだつたハルがもじもじと見上げてくる。

『うん、ずっと、ずっと一緒にいてね？』
「もう一当然でしょー！このこのこのーー！」

うつやうつやと撫で繰り回しほっぺにすりすりしてからちゅっとした。

今なら黒死くめ全員の土下座と徹底的な床掃除で赦してやれる気がする。

「それにしてもあいつら、いつまで私たちのこと無視する気かしさ。

」

ハルを抱っこしたまま睨みつけるとハルが不思議そうに小首を傾げた。

『それはミチルとぼくに今も透過と防音の魔法がかかってるからだけ・・・あ、えっとね、いまかかってる透過の魔法はぼくたちの姿をそこに無いように見せる魔法で、相手には後ろの景色がそのまま見えるよ？それと、一つ目の防音の魔法は音や声を外に漏れないようにする魔法でね、どんな大きな音でも外には絶対聞こえないんだ。』

ちょっとだけ魔法には自信があるんだ、えへへ。と態度で表し、はにかんで得意げにするハルに思わず頬擦りする。こいつめ！なんて可愛いんだ！！でもごめんね？あのときはハルのちゅつ + シヤボン玉ふわんに夢中でどんな魔法かしつかり覚えてなかつたの。効果も聞かなかつたしね。

そうか、あいつらには見えてなかつたし聞こえてなかつたのか。良かった。本当に良かつた。

それにしても一つの魔法を一緒にかけられるなんてハルってちょっとすごいんじゃないかと思つ。

この世界のことは全然知らないけど、この様子ならハルに魔法の才能とかけつこうあるんじゃないかな？

いまは幼いけど将来は魔法学校に入つてその才能を伸ばすとか、きゅーきゅー言いながら星のついた短い杖を振るハル・・・やばい、誰にも見せたくない！って、なんで私は入学してないの！？才能がないから？それなら止めないで警備員さん！私は怪しいものじやないの！ちょっと影からハルの様子を見に来ただけの婚約者で恋人なの！未来の奥さんなのよ！！いいでしょ！？少しくらい！だいたい全寮制のがいけないのよ！ハルがちつとも家に帰つてこないんだからー！

ダメだ！魔法学校はだめだ！！あんなに会えないんじゃハルが誰かの毒牙にかかるのは時間の問題、むしろ瞬殺だ！！ハルー！私を捨てないでー！！小さな街灯の明かりの中、ピンクの竜と二人で去り行くハルに手を伸ばし倒れこむ。ああ、ハル・・・そのピンクの竜子ちゃんは新しい恋人なのね？

『ミチルの世界には魔法はなかったの？』

魔法学校入学の文字が消えた。

つんつんとパジャマを引っ張り、ちょっと首を傾げるハルの背中を撫でる。どんなに思い出しても私のまわりにそんな奇特性な存在はなかつた。

「うん、一つもね。本の中や想像の産物の中にはあったけど実際に使つたことも見たこともなかつたの。」

『そなんじゃあ、ミチルに本物の魔法を見せたのはぼくが初めて？』

期待のこもつた眼差しに頭をなでなでする。目を細めて氣持ち良さそうなハルが、早く早くと言つてる氣がする。

「そうよ？ハルが初めてだつたの！ハルの魔法は可愛くつて綺麗だつたあ・・・」

思い出してうつとりする。魔法つてもつと呪文とか唱えたり杖を振り回したりするのかと思つてた。だけどハルの可愛い魔法はそんなことなくつて“ちゅつ”だけ。

ちゅ・・・はつ！これよ！これに氣をとられてあんな羽田に陥つたのだ！ハルにこのことを注意しておかなければこれから先、私の身がもたないのは目に見えている。他人に魔法を使うハルがその度ち

ゅつなんて・・・耐えられない！

「ねえハル。よくわからないけど、魔法を使つときつて絶対ちゅつてしないと・・・いけないの？」

きょとんとした顔のハルがしばらく考へると、ふるふると首を振る。

「じゃあ、ちゅつしなくていいのね？」

そう聞いたとたん、はつとしたハルの田がわざかに泳ぐ。なに? どうしたの?

ん? と覗き込むとハルはぎゅつと田を瞑り俯いてしまつた。体を丸めてなるべく小さくなりながらぷるぷると震えている。なにが起つたのかわからず、なんとか落ち着かせようとその体を撫で続ける。

やつと聞こえたハルの声は泣き声ついでとても小さかった。

『・・・・』
『・・・・』

「・・・どうしたの? なんで謝るの?」

ずっと俯いたまま震えているハルが、きゅうっと手を握り締めている。その手にかぶせるように掌で包み込み親指で優しくなす。

『本当は、必要ないの。キスも、何も・・・でも、ミチルに少しでも触れたかったから・・・だから、ぼく・・・』

くうーっ！ ほんとなんて可愛いんだ！！ 腕の中でいまだお腹を上にして丸まっているハルをぎゅつと抱き締め、そのほっぺに何度もキスをする。

おずおずと顔を上げたハルとしつかりと田を合わせ、最高の笑みを

浮かべた。

「ハル！キスをするのもされるのも私とだけって私に誓つて……！」

当然私もハルに誓つたのはいつまでもない。

私の唇はハル専用、オンリー・ハルだ！！

向こうからは見えていないとわかつたので遠慮なく黒尽くめたちを観察する。

氷に囲まれたハルの部屋は、もともと大きかったハルとその周りを取り巻いていたマーブルのさらに倍はある広さだった。広さだけで天井まではあんまりない。

マーブルからけつこう離れた広い場所で、魔法使いのようなロープを着た黒尽くめは広範囲に散らばり、しゃがんで床をガリガリすることに一心不乱になつてし鎧を着た黒尽くめたちはそれを邪魔しないような感じで壁際に点々と並んでいる。

・・・ダメだ。観察してみてもさっぱりわからない。

「あいつらはしゃがんで何やつてるの？」

ひとんち来てまで落書きなんて一回叱つたほうがいいんじゃない？
言葉が通じなくても床を指差してバツ印でもしてみせたら通じない
かしら？

『あれは前の人間たちが作つた魔法陣を直してるんだよ。』

魔法陣？と思いながら、ハルから黒ローブに視線を移すと必死な様子でまだ作業中だ。もしかしたら壁爆破のあとあたりからずつとや

つてたかも・・・いくら思い出そうとしても金髪と理解不能な微妙
言語しか思い出せなかつたけど。黒ローブたちのしゃがんだ位置か
らみて、これが一つの魔法陣だとしたら直径がかなり大きなものに
見える。

『時間が経つて魔法陣の線が細くなつたところを、ああして氷に深く傷をつけてそこに特殊な魔法液を流し込むことで元の形に修復してるんだ。しかもその魔法液には一つ制限があつて、効力を失う前に次の魔法液を注がないと魔法陣自体消えてしまうから、一年くらいやり直す必要があるらしいよ。』

「ハルは物知りね！」
『・・・え、えと、ぼくがここにいる間、その、人間がちょっと話してたから・・・』

「ハルは物知りね！」

うりうりぐりぐりしてから聞こえた、ハルの寂しそうな声に胸が締め付けられる。石になつてどれくらいここにいたのかはまだ聞いてないけど、きっと一人ぼっちだつたんだ。そんな氣がする。ぎゅつとハルを抱き締めて、頬をハルのおでこにくつつけた。

「一体、何をする魔法陣なの?」

聞いてはいけないのかもしだい。心臓が軋んでるように痛くてなんだかよくない予感がする。それでも聞いておくべきことだと思つ。

「…………ぼくを…………起こさないためだよ…………」

やつぱりかー！黒死くめー！！始めから胡散臭いと思つてたんだよー黒死くめだし部屋に入るにしても爆破だし、あいつらじつち側見

ても友好的じゃ全然ないし！

きゅっと握った小さな両手を見つめたままハルがうなだれていく。小さな体がさらに小さくなつたみたいに。

『仕方の無いことだけど、人間はぼくが怖いんだ。それに、いくら石になつてもぼくが何らかの原因で起きるかもしないと考えたんだろうね。なるべく外からの刺激を与えないように武器、魔法、人間はもちろん、動物も魔物も何も通さないように設定されてる。』

少し悲しそうに笑ったハルがどんなに孤独だったかなんて想像もつかない。つかないけどこれからは私がいるつて伝えたい。伝えたいけど言葉だけじゃ薄っぺらな気がして、少しでも長く一緒にいられるように願う。あと寿命を延ばす魔法とかアイテムを探さないと。ハルと生きるには何百年何千年単位かもしれないけど・・・延ばす。延ばしてみせるよ、ハル！私の目的はハルだから！いろんな意味でハルだから！！

うん、薄っぺらでもやつぱり伝えたつい。言わずに後悔より言って後悔だ！

「ハル、起きてくれてありがとう！そしてこれからもよろしくね！」

抱き締めて頬擦りして、おまけにハルの口にちゅうとする。口への不意打ちには弱いのか、もじもじするハルはこの上なく可愛くてたまらない。

『うん。ミチルもぼくのところに来てくれて、ありがとう・・・ぼく、いまひとつ幸せ・・・』

嬉しそうにほほえむハルを見て目頭が熱くなる。

くーっ！泣かせる！泣かせるわ！ハル！！私たちまだ始まったばかりじゃないの！それなのにもうこんなに幸せを感じてくれるなんてどんな人生送ってきたのよ————！そりや石になるなんて普通の人生じゃなさそうだけど、こんな幼子になんてことを！く・ろ・づ・く・め————！

つんつんとパジャマを引いて見上げるハルに、黒沢くめへの憎しみが心の端っこに迫いやられる。

『さっきの結界のことだけじゃ、あの結界はぼくの竜膜のさらに外側にあるんだ。竜膜との間隔はミチルの身長くらいなんだけど、あれに触れてたら危なかつたんだからね？』

「えつ、そうだったの？」

ということは感激のあまりあそこで立ち上がり万歳したら即アウトだったわけね。でももう少しで絶対万歳してたはずだ。その自信がある。まだハルに触れてもなかつたし、まだハルと何にもしてなかつたのに。ああ、ほんつと無事で良かつた……！

「それならハルがこの中に入れてくれたから助かつたんだね、ありがと！ハル！」

ほっぺにちゅうとするとハルはぎゅっとしがみついてくる。そのまま擦り付けるように顔をパジャマの胸元に埋めてしまったハルの背中をそつと撫でる。何かに怯えたようなハルを宥めるようにゆっくり撫でてみると、ふと一つの疑問が浮かんだ。

「あれ？そういうえば今のハルはあいつには見てないんでしょ？ハルがないこと、気づいてないの？」

しがみついているハルの頭から背中をなでしながら、じつと見下ろす。

じまじくじてから上げられた海色の瞳は少しだけ弱々しかった。

『大丈夫だよ。彼らの用にはいつもと変わらない、石化したぼくの姿が映ってるから。』

「つ・・・ハルつ！」

ハルのほっぺに自分の頬をぎゅっと押し付けると、その谷間を一粒の涙が伝っていく。

石化したぼく、なんて平然と言わないでほしい。それも“いつも”だなんて。

私の知らない間にそんな魔法も使ってたなんて驚いたけど、ハルのことをもっと知りたいと、教えてほしいと思った。

黒ローブたちが杖と手を高々と掲げて呪文を唱えだす。

しばらく意味不明な言葉でもごもご唱えた後、杖と手をクロスさせると赤く発光した線が床の魔法陣から伸びて氷の壁を薦のように伝つて広がっていく。ぐねぐねとした模様を描いていたその赤い線が壁を一周して魔法陣の反対側に触れた瞬間、魔法陣が一際赤く輝いた。

ふうっと全ての赤い光が消えると、それを見届けていたらしい黒尽くめたちが帰つて行つた。

入つてくるときに爆破して作つた穴から、
掃除もしなければ直して帰りもしない。

『これでまた一年くらいは来ないよ・・・』

その静かな声に腕の中のハルを見ると、どこか遠くを見ていひみつな様子だった。

ぼんやりと黒尽くめを見送るハルの目を片手で塞ぐ。
あんなのハルが見送る必要なんてないよ。

あんな礼儀知らず頭痛と腹痛と水虫で寝込んでしまえ！そしてお粥を食べて舌を火傷するといい！慌てて水を飲みに行く途中ではタンスの角に足の小指をぶつけて泣け！泣き喚け！泣いても赦さないけど…もう一度と来なくていいから！一生来なくていいから…！
黒尽くめたちの背中に念入りな怨念を一回ずつ、黒ローブたちにはさうこもつ一回ずつ送つてからハルの目の前から手をじける。

よし。まずはお互いをよく知るための取っ掛かりとして年齢の話題が無難よね。

ハルの意識を二つ目に向けるように抱っこしなおす。

「ねえ、私は今年25歳になつたの。ハルはいくつ?」

だいたいの予想としては10歳前後かな?

ちよつと考えるように小首を傾げたハルが、小さな両手で指折り数えてる。もーすごいかわいい。

ああ、この無防備なお腹にはぶぶぶつとしてみたい。ハルが呼吸するたびに上下するお腹の誘惑は半端ない。

私の鼻息が少し荒くなり始めたところで、ハルが両手を前に突き出して手のひらを広げて見せる。

指の数が年の数。そういう意味であらうその行動は子供で、内心ほくそ笑む。

『うーん、しばらく数えてないから正確にはよくわからないけど、たぶん100は越えてると思うよ?』

『100!? ハルは私より大人だつたの! ? . . . 』、『めんなさい、年上ぶつて . . . 』

『えつ、あ、ち、違うよー。ぼくの100歳はまだまだ子供だよー。きっとー。』

予想を遥かに超えてたけど、焦ったよつにぶんぶんと首と両手を振るハルは本当に子供っぽい。

そうだよね、大人の竜だつたらなでなでありますりすりとか嫌がりそうだよね。私に触るな人間が!とか。しかもすつごいプライド高そうな気がする。噂のシンデレとか言つてる場合じゃない。愛を育む前に命がなくなりそうだ。

良かつた！ハルがまだ子供で。いまからスキンシップに慣れてもらえば・・・ふつふつふ、あーんなことやこーんなこともいづれ思いのままよーいらぶらぶ結婚生活のために私はやるわ！

薔薇色の未来を思い浮かべながらハルの片手を握ると、そうだよねーとハルのほっぺにすりすりする。

では次の話題よ。次は・・・うーん、『趣味は？』って聞いても最近は何もできなかつたんじや・・・あ！もつと重要なことがあつたじゃない。

ハルの心を抉るかもしれない、重要だけど憂鬱になる質問が。聞いていいのかなあ・・・？でも聞かないとわからないしなあ・・・ハルを撫でながら様子を窺う。

「ハル・・・ハルは、いつからここにいるの？」

ぴくっと揺れた小さな体が少しだけ硬くなる。

ハルがその頃を思い出しているのかパジャマのお腹あたりに視線を落としていく。

ゆっくり戻ってきた視線は少しだけ暗くて泣きそうに見えた。

『産まれてしばらくしてから、かな。』

「・・・一人で？」

『うん・・・』

泣きそうに見えてもハルは泣かなかつた。

でもその落ち込んだ答え方が全てを物語つてるのよー一人は寂しいはず、しかも100年も！！

ぎゅううううと抱き締めてぐりぐりすりすりして目一杯キスする。最後にしつかりと胸に抱き締めなおした。

100年も一人でいたなんて・・・

しかも年一回来るらしい黒死くめたちはあんな殺伐とした状態だから話し相手にすらならないし。

あんな空氣の中で一人でいたなんてハルが不憫すぎる。

そもそもどうしてハルを怖がるのか私にはわからなかつた。こんな可愛いハルのどこが怖いというのか。そりやあ元の大きさはちょっと大きかつたけど、ハルは暴れん坊でも喧嘩つ早いわけでもないのに。

避けては通れない質問、よね。それにこれから先ハルと外出するためには知つておかなければならぬことだと思うし。

「あのね？今からまたぶんハルが傷つくことを聞くけど嫌いにならないでね。お願ひ！」

しばらくして腕の中でじっくりと頷いたハルにゆっくりと問い合わせる。

「・・・どうしてこの世界の人間は・・・ハルが、怖いの？」

そつと伏せた海色の瞳がわずかに翳つていて何かを堪えるように小さな両手を握り締めている。

やっぱり聞かれたくないことだよね？「ごめんね、ハル・・・ハルの手を握り締める。少しでもハルが怯えなくてすむように願つて。

きゅっと握り返してきたハルの小さな手は少しだけ震えていたようだつた。

『・・・今からずつとずつと前、ぼくが産まれて少し経つた頃に大きな争いがあつたんだ。ぼくは興味がなかつたから加わらなかつたけど、それは古代種といつぼくと同じ種類の竜の間で起こつたものだつた。何の前触れもなく突然起こつた古代種同士の争いは日毎に激しくなつて、いろんなものが壊れたよ。街も、お城も・・・地形

が変わってしまったところもたくさんあった。争いは五日ほど続き。
・そして、ぼく以外の古代種たちはみんな滅んだ。骨も鱗も、彼らのものは何も残ってなかつたよ・・・そんな、世界を壊せるくらいの力があるものたちと同じ血を持つぼくが、人間は怖いんだ。仕方ないよね・・・だからぼく、ここにずっと口になつてよつと思つたんだ・・・』

ぎゅっと握つてたハルの手に少し力をこめる。

ハルがそつと見上げてきて、ぼくのことが怖い?と聞いてるみたいだつた。

「私はハルが何であつても全然怖くないから!古代種でも新種でもどんと来いよ!それにハルはその事件にこれっぽっちも関係ないし、もーそんなことなら私の方が断然怖いじゃない!いーい?ハル。きっとハルが思つてる以上に私はハルのことがどうとも可愛くてかっこよくてこのお腹のラインとか堪らないとか思つてるような変態よ?ハルの可愛さにすぐノックアウトされて、いい大人なのに鼻血も出しちゃう。見てよこのパジャマ。血まみれでどんな惨劇に遭つたのかと思われちゃうよ?あとは鼻息が荒くなるのは当然でしょ?それにすぐハルに触りたくなるし、無意識でも触つてる。ね、怖いでしょ?こんな危険人物なんだよ?それでも私が好き?怖くなつた?」

じつと覗き込むとハルがふるふると首を振つた。

『どこも怖くなんてないよ?それどころかそんなにぼくのことを想つてくれてたなんて嬉しくて、ミチルのことがもっと好きになつた。一杯好きになつたよ?一杯大好き!..』

ぎゅっと胸に抱きついてぐりぐりとおでこを擦り付けるハルの頭を撫である。

「ハル、一杯大好きっていうのはね、愛してるっていうの?」

『あいしてる?』

「そうよ?私はハルのことが一杯大好きで一杯幸せにしたいの。これが愛してるってことなのよ?だから私はハルのことを愛してるって自信をもって言えるわ。」

抱き締めていたハルを見つめる。

「ハル、愛してるよ。」

そう言つてぎゅっとハルの口にキスするとハルがまん丸な目をして見上げていた。

そのまま数秒固まつてたハルが両手をあわあわ意味もなく振り回すと、ぱつと自分の口を押さえる。

驚きと恥ずかしさがない交ぜになつたような様子と緊張したようにぴんと伸びたしつぽが可愛くすぎる。こういうのが田の中に入れても痛くないってことかと実感していると、せわしなくぱぱぱぱりと瞬きしていたハルの両手が伸びてくる。小さな両手がほっぺに触れると、意を決したようにハルがぎゅっと田を瞑つた。

『ほ、ぼくもミチルを愛してるー。』

ちゅつとキスをした後とっても恥ずかしいことをしゃつたと言わんばかりに、うきやああとか言つて短い腕としつぽで頭を隠そうとしてるハルを田一杯抱き締める。

もーこんな可愛いの絶対手放してやんないんだからー————!!

ハルに乗せてもらつて、やつてきました城下町。

左腕にハルを抱つこしてお店を覗いていく。

ハルは透過の魔法を自分にかけてるから人に見られる心配はないし悪代官に狙われることもない。それに竜自体珍しいらしく、余計な厄介事に巻き込まれないためにも必要なことだつた。

ついでに血ぬれのパジャマはハルのおかげで素晴らしい装備になつてゐる。

「うなれば竜の鱗セツト！」

ハルの鱗一枚とパジャマが合わさつて、赤い長袖ワンピースヒルムシユーズのような黒い布靴になつたのだ。

これがこの世界の一般的な女性の服装とこいつとで無防備に町をうろちょろしてたところ。

「なあなあ、そこのお嬢ちゃん。いい話があるんだがよ、こじりじゃちよつと、な？」

ほんとにこいるのねえ、こいついう手合いが。

妙に感心すると、ちらりと腕の中のハルを見てから素直について行く。

つれて行かれたのは 暗い路地裏だった。

「お嬢ちゃんはバカだなあ、こんな簡単に知らない人について行つちゃダメだぜえ？さあさつとと出すもん出してもらおうが、んん？」

げへげへ笑った顔はかなり下品。

丸いボールをちらつかせながら男が一步近づく。

何あれ？

とつても自信満々な様子からただの町娘を恐喝しようとした魂胆は丸見えだけど、その右手で上に放り投げては受け止めてる赤いボールはただのボールではないの？

「ちよっと、その丸いのは何？」

ボールを指差して尋ねると、男がにやあっと笑う。

「これかい？これはねえ、お嬢ちゃんが言つことをきいてくれなかつたときには使つものだよお？」

ひひひつと笑つてもう一回放り投げる。

「ところで、いい話つて？」

「わっかんねえガキだなー、あんなのはう・わ。さつと金田のものを出せば助けてやるぜえ？」

「・・・はあ、やっぱりね。それならこの話はなしよ。」

ため息を吐いて男を見れば、下品に笑つた男が右腕を眼前に突き出した。

「これを見てもそんなことが言つてられるかなあ？」

振りかぶつて勢いよく振り下ろした男の手から赤いボールが離れる。

「弾けるおつ……」

飛んできたボールが男の声に反応したのか、すぐに割れて中から赤い炎が噴き出した。

舐めるように伸びてきた炎が目の前30センチのあたりでふしうつと消えると次の瞬間、目の前30センチのあたりに渦を巻くように出現して男に踊りかかった。

驚いたような男が横に転がつたけど、避けそこねたのか頭頂部の髪がちぢれて煙が出ている。

「ハア！？まさか反射の魔法かっ！？そんなものいつ使いやがったこのアマあー！」

体を起こしながら怒りに満ちた声で男が叫ぶ。
そっちが仕掛けてきたんじゃない。私は何もしないのに。

「だが反射の魔法は一回しか効果がねえ！今度はもうつたぜえい！」

そう言って男は次のボール魔法を放つ。

当然魔法は跳ね返った上、今度は威力も上がつてた。

『ついでに增幅の魔法もかけちゃつた。』

首元ですりすりしながらハルが機嫌で教えてくれた。

さつすがハル！そのうち星のついた短い杖と黒くて先のちょっと折れた三角帽子をかぶつて魔法を使ってほしい。帽子のつばからは角がぴーんと飛び出してきてきっとかわいいに違いない！しつぽを振り振り杖をくるくるする度に星が散らばって、えーい！の掛け声で魔法が発動・・・あっぷな！もうちょっとで鼻血が・・・

声を出すと不審に思われる所以ハルにすりすりし返すだけにして、ずびっと鼻を啜つて男を見た。

顔面蒼白で腰を抜かしたように尻餅をついて、地面についた両手で上体を支えている。

一歩踏み出しだけで男の体が大げさなほど震えた。

「どうすればいいか、わかるよね？」

数件同じ日に遭つて、当面の路銀が出来たと財布の紐を締める。それにもつ一件遭遇して相手が勝手に自滅したとき。

「君、ちょっとこいか？」

そつ声をかけてきたのは灰色の全身鎧だった。

歩く鎧は言った。

「次の討伐に加わってくれないか。」

と。
もちろん断る。

何の討伐かは知らないけど、そんなことしてるヒマなんてないから。
私には崇高な使命があるのだ！

ハルを精一杯守りハルを目一杯慈しみハルをこれ以上なく幸せにして
ハルを愛情一杯愛で撫で舐めまくりハルを深淵の底よりも深く愛し
尽くしてハルとのでれでれらぶらぶ生活をハルとともに送るという
輝かしい未来のために私の寿命を延ばす魔法かアイテムを手に入れ
るという使命が！！

「せっかくのお誘いですが、お力になれば申し訳ありません。」

ペコッと頭を下げて路地裏から去るとする。

「あー待ってくれー君ほどの力があれば助かるんだー頼むー謝礼な
らなるべく出そうーどうだー？」

「出来ません。」

「そ、即答か。少しも迷わんとは・・・何故だ？理由くらい聞いて
もいいだろう？」

理由？

そんなに聞きたいなら教えてあげよう。

「私には使命があります。それだけです。」

そっとハルを見つめて微笑む。

ああ、和む。見つめ返してくるハルのくりゅとした海色の瞳なら何日でも見つめたい。ずっと見つめたい。

じっとハルを見つめすぎて少し鼻息が荒くなる。

そこでハルがちよいちょいと袖を引いて鎧を指差した。

そうだ、人がいたんだったね。

しかし何をどう誤解したのか、慌てたような鎧が体の前で手を左右に振り始めた。

「すまない！そんな病弱な体だとは知らず無体なことを言った！今は忘れてくれ！」

「・・・では、失礼します。」

意味がわからなかつたが、もう一度鎧に頭を下げてからその場を去つた。

二度あることは三度ある。

あのあと三度どころではなく鎧たちに勧誘された。

原因はばかすか貯まる路銀の元。

路銀が貯まるにつれ、思い出したように鎧に遭遇する。

たぶん鎧の中身は別人だと思うけど、ほとんど区別がつかなかつた

から鎧と話すたび鎧が同じずきでテジャヴを体験した氣になつた。

そして「」の鎧も。

「『』のあなた、次のフレイムドリゴン討伐に参加してくれませんか？」

え？ 今、『』とおっしゃいましたか？

ちらりと鎧を見た瞬間、ぎゅっと小さな手に腕を握られる。ハルを見ればうるつるした瞳で浮氣はダメって言つてた。わかつてゐ、わかつてゐよハル。ハル以上の竜なんて私にはいないから。

安心をせるようにハルに微笑んだり鎧がぱぱぱりと拍手した。

「参加してくれるんですね？ ありがとうございますー。最高褒章はフレイムドラゴンの血もしくは鱗です、よろしくお願ひしますねー！」

あ、と思つてゐるうちに言ひ逃げされた。

迂闊！ 断られないように見事な俊足で走り去つた全身鎧の総重量を知つておくべきだったのだ！

呆然と砂煙を見つめているとハルが小さな手で指先を握つてきた。

『これに参加してみよう。』

急にビうしたんだらうと首を傾げて見つめれば、ハルがいたずらつ子のように笑つた。

『まぐ、フレイムドラゴンの血が少しでいいから欲しいんだ。』

12・5 ハルのミライ（ハルの視点）

ぼくは歓喜した

思いもよらないところで耳にした

ぼく以外の竜の存在に

竜の血

それがあれば、ぼくの願いが一つ叶うから

竜の血は人の命を数年延ばす

でも、それだけじゃない

竜の血は肉体を強化する

ぼくの血は彼女には強あざる

一滴でも彼女を死なせてしまつへり

だから、竜の血を手に入れよう

その後ならぼくの血にも耐えられるから

そうすればぼくとじゅうと、こつまでも一緒にいたる

まへと回じになつた愛する彼女とふたり、こつまでも

ああ、そうだ

彼女には黙つてこよ

終わりのこない明日と、絶望しなつよ

13 ギルドに登録

開けっ放しの小ぢんまりした建物の横に立て看板があつた。

“『自由にお持ち帰りください』”

下にあるトレイの中には紙切れが数枚入つている。

“勇者求む！”

君もフレイムドラゴンの討伐に参加して栄誉を手に入れよう

!!

説明会予定日 ユヌの月 三日 正午より別館第一会議室にて

討伐実施予定日 ユヌの月 十日 雨天決行

奮つてご参加ください！！”

立て看板の上では、板を嵌め替えて表示するタイプのカレンダーが
今日はユヌの月一日だと示していた。

町の人にギルドと呼ばれる小ぢんまりした建物に入ると、ロビーにいた何人かがこっちをちらりと見てから視線を戻す。窓口が5つ並び、各自に数人ずつ並んでいる。

一番左端の窓口に並ぶと、みんなお金を受け取るだけだったみたいですぐに順番が回ってきた。

イスに座るとハルを膝の上にのせる。

「ギルドに加入したいのですが、どうすればいいですか？」
「かしこまりました。」

イスに座った綺麗なお姉さんが心得たとばかりににっこり笑って、一枚の用紙をカウンターに広げる。

「いらっしゃるお客様の名前を」と記入ください。

差し出されたペンを受け取り、言われたところに名前を書く。
次にお姉さんは薄いカードをくれた。

「ではこちらにもお名前を」と記入ください。」

お姉さんの字で日付の書かれたカードは裏面に紙を貼り付けた金属の板だった。

表には紋章のような刻印があり、薦の絡まつた一匹の龍が追いかけるようにして相手の尻尾に噛み付いている。

かっこいい・・・

竜の模様を見つめているとお姉さんが「ホン、と咳払いをした。
顔を上げると、お姉さんが引き攣った笑顔を浮かべている。

すみません、つい。そう思つて軽く頭を下げてから名前を書くと、お姉さんがカードを受け取つて先ほどの用紙の上に置いて割り印を

押した。

カードの表と同じ図柄の左半分が、カードの裏にくっきりと残っている。

イスに座つたままのお姉さんが後ろを向いてカードを何かにかざすと、カードをトレイにのせてカウンターの上に置く。

「これでギルドへの登録は完了です。お疲れ様でした。」

手に取つたカードは硬めのラミネート加工がされていた。
素晴らしい技術である。

これで多少手荒に扱つても、この素敵な竜の紋章が汚れることはないのだから。

じつと見つめていると、またしてもお姉さんが「ホンと咳払いした。

「ギルドについて説明致しますか？」

ハルを見れば首を縦に振る。

ギルドについてハルも知らないと言つていたからちょいよかつた。

説明を聞いた。

最重要事項として魔物を倒せばお金をくれるところについてはわかつた。

あとは依頼のランクが高くなるほど報酬も高くなるそうだけじ上げすぎると田立つだらうし、へ退治とかの依頼を名指しで命令されたりするとか。

やつぱり目立たないためにもランクは上げない方が良い気がする。

それに私には崇高な使命があるのだ。

左手にハルを抱き、右手でカードを掲げて立ち上がる。キラッと光る笑顔でお姉さんを見下ろした。

「どうもありがとうございました。」

「い、いえ、こちらこそ・・・」

引き攣つた笑顔でお姉さんは手を振ってくれた。

町から離れた夜の草原は涼しかった。
人に見られないために夜にしたけど、とあたりを見回す。
誰もいないのをハルも魔法で確認した。

『やるよ?』

見上げて言うハルにこくりと頷く。

「うん、まずはハルの魔法がどれくらいのものか知つとかないと。」

魔法学校エリートコースのハルを思い描いて前方を見た。腕の中から何の動作も呪文もなくハルが魔法を放つ。

あたりの草原が一瞬で燃え上がり瞬時に燃え尽きる。

あとに残つたのは大半がはげた大地になつた草原だった。

14 初めての夜（前書き）

「注意ください
相手は竜ですが、たぶんR12くらいだと思います。」

ついにこの時がやつってきたのね。

ハルと出会つて初めての記念すべき夜。

それを宿の一室で過ごすことになつて、街でも大きな五階建ての建物に入る。

だがしかし！ 残念なことにここにスイートなんてものは存在しなかつたのだ！

仕方ないので最上階の角部屋を頼む。

ハルを抱つこしたまま部屋に入り、即座に鍵をすると室内を見回した。

10畳ほどの広さにシングルサイズのベッドが2つ、テーブルとイスのセットが1つ。

薄そうな壁にはハンガー掛けがついている。なんというシンプルさ。奥の壁に扉があるから向こうはトイレとお風呂なんだひつ。

ハルの防音の魔法がなければ隣に丸聞こえではないの？といつ有様にがつかりする。

続きの小部屋にトイレとお風呂の確認に入つて、ベッドの上に座つてるハルを振り返つた。

「は、ハル！ この世界にお風呂はないの！？」

「ぐ」に形相で振り返つたのが、ハルがびくつとした。

『お、お風呂？』

「そうよ！ 入浴！ お湯を・・・うーん、部屋で温泉に入る感じ？」

『えと、ここにミチルの髪いつなのはないと想つ・・・』

『いかでじやまざと盥うハルを覗き込む。

『たらいに水を張つて、そこで洗うのが一般的、だつたはず・・・』

ハルがちらりと、小部屋の壁に立て掛けられている大きなたらいを見る。

浅くて大きいそれは、そうするのに適しているような大きさがあり、確かに小部屋はタイル張りでたらいを置けそうな広さもあった。

どうやらこの100年で浴槽は発明されなかつたようだ。

ふと、そわそわしているハルを見るとぴやっと顔を逸らしてもじもじしている。

これは、もしかしたら良い機会かもしれない。

薔薇色の未来のために。

小部屋に入ると隅に大きな排水口があるのに気がついた。

石鹼で先に手を洗つてからたらいも洗う。

よく濯いでから蛇口の下に置いて水を溜め始めた。

「ハ・ル。」

ハルに近づき、こいつと微笑むとハルが何?とこいつに首を傾げて見上げてきた。

「洗つてあげるね?」

ハルを抱き上げて意氣揚々と小部屋に入る。

しばらく腕の中でじつとしてたハルが、はつと気づいたように手を振り出した。

『や、ほつ・・・ええー!』

よくわからない声を出してハルが逃れようとする。

「もしかしてハル、水浴びとか嫌いなの?」

脇の下に手を入れて田の高をまで抱き上げるとハルはふんふんと首を横に振る。

『や、嫌いじゃないけどこれはちょっとこの・・・』

何だか焦った様子でぎくしゃくしてハルのほっぺにかけようと/or>。ぴつとハルの動きが止まって、ふしゅうと空気が抜けたように頃垂れた。

たぶん諦めたんだと思つ。うへへ。

緩む類のまましゃがみこみ、ハルの背中から水をかけようとしてふと思つた。

竜が変温動物だとしたらいきなり水じゃ寒いんじゃない?

「ねえ、これお湯にできる?」

『う、ん。お湯にするのは簡単だけ・・・ねえやつぱりやるの? ぼく一人で入れるからミチルだけで・・・』

「もう!妻が自分の夫を洗つて何が悪いのよー!」

ハルのほっぺをむにゅむにゅしながらハルの口にぶちゅうと口付けた。

今までの軽い触れ合いじゃなくて長くくつつけてペロリと舐める。驚いたようなハルが少し口を開けたおかげで、舌は簡単に入った。少しひんやりしたハルの口内を獲物を探すようにして舐め上げる。次第に、硬直して目を見開いていたハルの瞳がじろーんとなつてう

るつるしていく。

呼吸が荒くなり、ふるふる震えるハルの両手がワンピースの胸元をぎゅっと握り締めてしつばがぴんと伸びていく。

「・・・ふ、うん、ミチ・・・」

牙の先がちょっと痛かったけどハルも気をつけてくれてるみたいで、嫌がつてないことが嬉しかった。

その後はお風呂にも入らず、何度もちゅーをしてハルを抱き締めたまま眠りについた。

会議室の後ろの出入り口から中をのぞくと、結構人が入っていた。ざわざわとした室内に入り、後ろのほうのイスに座る。膝にのせたハルがあたりをきょろきょろ見回してて、その可愛さに思わずため息が出た。

見上げてきたハルがどうしたの？と首を傾げると今度は鼻血が出そうになる。

あぶない、こんなところで出しちゃ放り出されかねない。

昨日のこと思い出さないようにも気をつけながら鼻を押さえると、時間になつたのか会議室の前の出入り口から大柄な男の人人が一人入ってきた。

壇上に立つと全員が席に着くのを見届けてから、すうすうと息を吸い込む。

「よくぞこれだけ集まつた！！諸君らの勇気に感謝する！それではフレイムドラゴン討伐について詳しく説明していく！ジェアン！」

「はい！」

元気よく返事をしたジェアンと呼ばれた細身の男が入ってきて大柄な男の横に立つた。

「その前にまず報告があります。昨晩のことですが、そのナジュ草原でフレイムドラゴンが広範囲型火炎魔法を使つたことが確認されました。被害は甚大、草原の6割が消失しています。これは我らに対する警告、もしくは挑戦と受け取つていいでしょ。」

あれ？どこかで聞いた話だ。

報告書を読み上げたジエアンに対して室内が騒然となる。

「広範囲型だつ！」

「やはりドラゴン、侮れぬな。」

「6割とは・・・やすがというべきか・・・」

「だからこちらの人数は多い！いかにドラゴンといえど・・・！」

「いや、一番の問題はドラゴンブレスじゃ。あれは避けるしかないぞ。」

ざわざわと騒ぎ出した人々とフレイムドラゴンに謝りたかった。

それはきっと昨夜のお試し魔法だ。

でもこんな大勢の前で訂正できないし、目立ちたくもないし。

これは先にフレイムドラゴンに謝つておいたほうがいいかもしけない。

ハルを撫でながらため息を吐いた。

「そんなに怖いなら無理せず帰れ。足手まといだ。」

ハルにすりすりしてもう一度ため息を吐く。

「お前のようなガキがいようがいまいが何ら影響はない。家に帰つておとなしくしててんだな。」

そういうえばフレイムドラゴンってビックリするんだろう？」その後の説明で言ってくれればいいけど。そしたら謝りに行けるのに。

「つたく・・・誰がお前みたいなガキを連れて、つて、聞いてるのか！？」

唐突な隣からの怒声に驚いてそっちを見ると、とても柄の悪そうな男が足を組んでこっちを睨んでいた。

見た目は20代。脱色しまくりのような褪せた金髪に焦げ茶のメッシュが入った髪はやや短く、両耳には5、6個ずつ原色の石がついており、左耳には青い石、右耳には赤い石がついていた。

たピアスをしている。ショート丈の黒いブーツに濃藍のズボンをブーツインして、素肌もあらわな紫のシャツは胸元が絶妙に開いていた。

ただ、灰色の目が人を射殺せそうなほど鋭すぎて、見えてないだろうけど慌ててハルを抱き締めた。

私はこの人を知らないし、この人も私を知らないはずだ。

この人がどうして怒ってるのかわからなかつた。

ねえハル、何があつたの？

ぎゅっと抱き締めたハルの耳元で小さく囁くと、透過と防音の魔法がかかつてゐるハルも声を潜める。

『ぼくもわかんない。どうも独り言を言って怒り出したみたいだ
けど……』

ああ、こんな短気な人の隣になるなんてついてない。さらにハルを抱き締めてため息を吐いた。

「しかしだ！諸君！！」

突然の大声で室内を黙らせ、視線を集めた大柄な男は豪快な笑みを浮かべた。

「これだけの人数がいるんだ！ 挟み撃ちさえできれば楽勝だろ！」
！背中に攻撃を集中すればいかにドランゴンといえど軽傷では済むま

じよじよと室内がぞよめいて、顔を見合わせるものがそこかしこ

に
し
る

「わせこかる！」とが言つてゐるナビ、そもそもモビルナビのフレイムドア

ゴンを討伐したいんだろう。

畠に被害がでてるとか？追い出すだけじゃダメなの？

私は討伐に参加してくれって言われただけしか知らないから、理由をきちんと知るべきかもしない。

ハルを見つめ、頭をなでなでする。

ハルみたいに話せばわかってくれる竜だつているんじゃないのかな。
もしかしたら血だつてわけてくれるかもしない。

そう思いながら話の続きを聞いていた。

会議室から出たところでギルドカードの提示を求められた。まわりの人も求められてて、各自提示している。

私もカードを提示したところ・・・あれ?なぜかちらりと顔とカードを見られた。

感じわるーい。

むつとしたのがわかつたのかギルドの人気が石のようなものを取り出した。

それをカードにかざすと、カードの上にほわわーんとイスに座る小型化した私が浮かぶ。

素晴らしい技術である。

でもそんなの撮影された覚えがないんですけどね。盗撮だよ、それ。まさかスカートの中とか見えないよね?

それにしてもみんな提示して素通りなのに一人だけ立ち止まってるのって結構目立つ。

だいたい疑われるようなこと何もしてないのに。

もしかして拾つた他人のカード持つてると思われてるとか?

でもこんなのは偽造し放題じゃないの?名前書いただけだし。

ギルドに入ればお得ですよつて何人目かの鎧が言つてたから入ったのにさあ・・・

しばらく確認していたらしい人から田の前にどうぞ、とカードが返される。

たぶん、入ったばかりの最低ランクが冷やかしかよとか思つてゐるんだ。きっとそうだ。べつ。

受け取つたカードをさつさとポケットに入れてギルドの建物を出た。

宿に戻つて部屋で早めの夕食を食べる。

この世界のメニューは焼いたお肉とかゴルフボールくらいの蒸かしたお芋とかスープとか、そんなどこか見たことのある素材の味を生かすような料理ばかりだった。

二人分のメニューが並んだ丸いテーブルの上にハルが座り、真剣な表情でお皿を見ている。

ああ、とつても癒される・・・

小さな手で慣れないフォークを使ってお芋を刺そうとしてる姿つたらもう！

何度も失敗してやつとお芋をフォークの先に刺し、でも何度もつづいていたお芋はぼろぼろと碎けてしまった。

あー！みたいな顔をしたハルに表情に出さないように悶えまくる。隠そうとしても口元はニヤついているけどそれは仕方ない。黙つてお皿の上で碎けたお芋をじっと見てるハルは撫でて抱き締めて頬擦りしたいくらい可愛かった。

まあ、やつたけど。

腕の中にいるハルの前に、私のフォークに刺したお芋を差し出す。ついでに見上げてきて、しょぼんと頃垂れた。

『不器用で、ごめんね・・・？』

「ううんーそんなことない！最初より断然上手くなつてるし、ハルはそのままが良いんだから！それにハルにあーんができる楽しみが無くなっちゃうじゃない？」

笑顔でハルを覗き込み、ね？とほっぺにキスをする。

『うん、ありがと。そ、それじゃあ・・・』

もじもじと見上げあーんをするハルにお芋を入れてあげた。
交互に食べて最後に「デザートのチーズケーキも食べる。
ふー、今回も悶え死ぬかと思った。

食後の一息をついて、今後のことを考える。

フレイムドラゴンの討伐までまだ日はあるし、先に謝りに行ってその時できれば血もちょっとわけてもらって、ついでに出て行つてもらえたなら万々歳なんじゃない?

フレイムドラゴン側の理由はまだ聞いてないけど、人間側のはわかつたし。

昨夜の草原のもう少し遠くにあるらしい岩山付近に住み着かれたせいで、そこで鉱石が掘れなくなつたとか。だいたいはその手前の何とか平原にいるらしいから、探すならそのへんからかな。

抱っこしたままのハルを見れば、胸に縋るようにしてぴすぴす寝息をたてて眠っている。

ふつふつふーこんなこともあらうかと鼻栓をして鼻血対策はばっちりよ!

ちよつと漏れただけど・・・

17 フレイムドラゴン対面

『迷い込んで来ただけなら去れ。』

結構距離があるのに聞こえてきた低めの声に顔を上げる。
ちらつと、夜の平原のずっと向こうに赤く光る何かが見えた。
ハルのときは竜と話ができる嬉しかったことしか頭になかったけど、
やっぱり頭に直接語りかけるような喋り方は少しだけ違和感がある。
まあそれもハルで慣れたから驚かないけど、この距離で話しかけて
きたことに対する驚いた。

まだ500mはあるみたいだから。

『ふつ、驚いたか。私は火炎を従えし炎竜。人間の子供よ、命が惜
しくば早々に立ち去るがいい。』

すいすいと息を吸う。

「もしもーしー」の声って聞こえますかーー！」

なるべくお腹の底から出した大声もこの距離では届かない気がした。

近づいて、徐々に見たその姿は背中側が朱色に近い赤でお腹側は
淡いベージュ。背中のたてがみと揺れるしつぽの先では炎が生きて
いるように燃え上がっていた。

さつき赤く光つてるように見えたのはきっとあれだつたんだ。

しかし100mあたりまで近づいたとき、挨拶もしないうちに交渉は決裂した。
ハルより小さいけど、それなりにでかいフレイムドラゴンの一方的な先制攻撃によつて。

なんて喧嘩つ早い竜だ・・・

『ふつ、我の魔法を跳ね返すとはなかなか見所のある人間のようだが・・・それは一度しか効果がなかつたのではないか?』

しつぽをびたん!と振り下ろして構え直したフレイムドラゴンの胸の前に、再び一本の燃え盛る槍が現れる。

その口元がニヤッと笑うと真っ直ぐ炎の槍が飛んできて、当然、跳ね返つた。

炎でダメージは受けないのかフレイムドラゴンは避けもせずに、眉を顰め目を見開くという至難の業をやってのけ、ふと何かに思い当たつたような顔をした。

『どうか、あの球状の魔法道具のせいだな?いくつ持つているかは知らんが・・・笑止!』

そう言つて一吼えしたフレイムドラゴンの体の前に、狙いを定めた二十本くらいの炎の槍が現れる。

『こいつの数には耐えられまい!残念だつたな小娘!』

言い終わつてから連続で放たれた炎の槍が、やつぱり全部跳ね返つ

た。

『なつ！？何をしたー。』

「私は特に・・・」

ハルがすうじだけです。

そう思ひてほそつと戻さると、フレイムアリゴンが激昂した。

『ここまで虚偽にされて黙つておれぬわつーー。』

「黙つてなかつたつて。」

な、なんだらひこの感覚・・・

この竜おもしろいかも。

一ヤーヤーしていふと、ふるふるしていたフレイムアリゴンがぐわつと皿を見開いた。

『これで仕舞いだつ！小娘え！！』

天を衝くような咆哮を上げ、長めの首を振りかぶるように曲げると向こうを向いた口のあたりが白く輝いてこるみつて見える。風の唸りをまといながら戻された首と頭。

その口の中には高温りしき炎の塊が渦巻いていた。

まあ、こつなるよね。
疲弊して寝そべった大きなフレイムアリゴンをつとつしながら声をかけた。

「少しでいいから話聞いてくれない？」

『・・・なんだ。』

もつ起き上がる気力もないのか、田だけを向けてくる。

「あっちの草原ちょっと焦がしちゃったの、あなたのせいになつて
るの。ごめんね？」

『・・・あれはお前だつたのか・・・あんなもの、見過ぎせれるわけ
もなく様子を見に行つたのだが・・・』

「あー、そのときに勘違いされちゃつたんだね。かわいそ。」

『かわいそつて、お前・・・』

呆れた一いつて感じで前に視線を戻したフレイムドライバーをさりと
んつんとする。

「でも、謝るつこでいけないとお願いがあるんだよな。」

今度は瞬き一つしてから無言で見てくる。
たぶん、なんだつて言つてると想つ。

「あなたの血がちょっと欲しいんだよね。どうかちょっとでいいの。
献血すると想つてこの小瓶にちょっとだけわけてくれない？」

ポケットから取り出した親指ほどの小瓶を視線の先で軽く振る。

『それを、どうする気だ。』

訝しげに見るフレイムドライバーを見て、ハルを見た。

「さあ？ 知り合いが欲しいって言つてゐるだけだから・・・
『・・・ふん、まあいい。その程度ならくれてやる。』

「ひつじしょ、といつ感じに赤い腕を持ち上げて鱗だらけの指先が近づく。

指先からひつひつと垂れた黒っぽい血が、鋭い爪を伝つて小瓶に注がれた。

「ありがとう。」

ハルを腕に抱きこんで、小瓶の栓をすると布に包んでポケットに戻した。

赤い腕を下ろしてまだ寝そべつてゐるフレイムダーラゴンを見つめる。

「あと何日かしたらあなたの討伐に人間がたくさんやつてくるよ。もし用がないなら早くここを去つた方がいいと思つ。」

静かに視線だけで見上げてくれるフレイムダーラゴンをじっと見つめ返す。

『ああ、やうやくせつまらおう。ここに執着があるわけではないしな。

』

はふーっとため息を吐きまた視線を前に戻すと、じぱりくしてちらつとだけじつちを向いた。

『・・・小娘、我に名をつけるといふ。』

なんといつ』

『だめ！…だめだよミチル！竜に名前をつけちゃだめ！』

突然ぎゅうっとワンピースの胸元を握り締めて叫んだハルを撫でて、
どうしたの？と見下ろす。

ハルは必死な様子でぶんぶんと首を振つて、泣きそつな瞳でふるふ
る震えながら見上げてきた。

『名前をつけると縛られちゃう…ミチルはほくのなのに…』

っ…！

慌てて押されたけど漏れたものは取り返せない。

今回もハルに被害はなかつたけどフレイムドラゴンには被害があつ
た。

突然大量に鼻血を噴いた私をぎょっとしたように見てから自分の肩
にかかつた鼻血を見てる。

ごめん。ちゃんと拭くからちょっと待つて。

ぎゅうっと抱きついているハルの背を撫でながらハンカチを探して
いると、フレイムドラゴンがゆづくつとその重い体を地面から起こ
した。

『…・血の契約か、面白い。』

何か格好良いことを言つて、ばさりと赤い翼を広げたフレイムドラ
ゴンが地面から浮き立つ。

もうちよつと待つてよ、まだ拭いてないんだから。それとも自分の
体が赤いから鼻血なんて目立たないと思つてる？はつはつは、残念
でしたー、時間が経つと変色するの知らないの？

ハンカチを持つた右手で追いかけたフレイムドラゴンが、すぐに手
の届かないところまで飛翔した。

『その期待には応えよ。だが今は休ませてくれ・・・』

疲れた声でそう言って、フレイムドラゴンは夜空の向こうへ消えていった。

溶けた大地と私たちを残して。

願わくはフレイムドラゴンがお風呂に入りますよ!!・・・

17・5 酔っ払いの戯言（ある酔っ払い視点）

それは偶然だつた。

賑やかな街の喧騒から離れて、一人静かに酒を飲んでいた。
夜空を薄く雲が覆い、月も霞んでいる。

わずかに酔い、空になつた酒瓶を片手に立ち上がろうとして、ふと
暗闇の奥に目を凝らした。

赤みを帯びたものが街を取り囲む高い城壁に沿つて移動していれば
誰だつて興味を引かれるだろ？

遠見の魔法を使い焦点を合わせれば、それは昼間のガキだつた。

ギルドの別館にある第一会議室に入つて、ざつと見回して持つた感
想は、お一結構有名どころが揃つてんなあ。だつた。

どこに座ろうか眺めた中に、まるで空席のように空いた空間に座る
小さな人影があつた。

よく見れば、何も持つてないのに頻りに何かを撫でてこるような手
つきの妙なガキだつた。

戦闘向きではないシンプルな赤いワンピースに黒い靴。

14、5に見えるが16、7と言われても、まあ納得はできそつだ
つた。

ちょうど空いていた隣に腰掛けでじつと見下ろしても無反応。

武器を持っているわけでも熟練した魔法の使い手でもなさそうな様
子に、今からやることわかつてんのか？って聞いてやりたかった。

あのガキがこんな時間にふらりふらり出歩いていることなど俺には全く関係ないことだが、向かう方向には関係がある。

興味本位か手柄独り占めを狙つてんのかは知らんが、今あれを刺激して街まで来たらどうするんだよ。

ちつと舌打ちして止めようと後を追うが、街を出たとたんガキの歩く速度が急に上がった。まじかよ。

ここからでは魔法を使った素振りは見えなかつたが、きっと巷で噂のあれでも使つたんだろ。

封じ込めた魔法をキーとなる言葉を口にすることで発動させる代物らしいからな。

だが便利な反面、結構値が張るマジックアイテムだと聞いていたが、あんな田舎くそそうなガキが持つてているとは驚きだつた。

自分に速歩の魔法を掛けるのに少しばかり時間を食つて、あのガキを見逃したかと思ったがなんてことはなかつた。

やはり目指したものはドラゴンだったようで、遮るもののない夜の平原にすぐにその背中を見つけることができた。

しかし同時に、赤く立ち昇るフレイムドラゴンの魔力も視界の端に捉えてわずかに焦る。

あの距離じゃもうすぐフレイムドラゴンの意識範囲にあのガキが入つてしまつ。

何とかしてあのガキを、そう思った瞬間、ありえないことが起こつた。

「もしもーしーしつの声つて聞こえますかー！」

お前はアホか！

首根っこを掴んでがくがく揺らし拳骨を食らわせてやりたい。

しかし俺が追いつく前に、あのガキに一本のフレイムランスが襲いかかった。

最悪だ。

いきなり中級魔法をぶつ放してきたフレイムドラゴンに足が止まる。しかしあとと最悪なのはそれを反射の魔法で完全に弾き返したガキだった。

一般的な反射の魔法はある程度の魔法なら完全に跳ね返せるが、中級以上になると完全とはいからくなる。

それをやってのけたということは、あのガキが使っているのが一般的な魔法を封じ込めただけの例のマジックアイテムなどではなく、自分の魔力を使った自分の才能による魔法ということになる。

俺も王宮筆頭などと呼ばれてはいるが、ガキがこんなに完全な形で中級魔法を跳ね返す場面なんぞ見たことがない。

目を見張る俺の視界で、さらにもう一発フレイムランスが放たれた。今までの中でのガキが何かした様子は無かつたが、それも完全に弾き返したガキの前に今度はフレイムランスが20近く出現する。

もはやさすがドラゴンとしか言えなかつた。

詠唱なしのうえ、制御の難しい中級魔法を20近くも同時に操れるなど。

格が違うすぎる。

終わつたな・・・

あれを連続で受けるには反射の魔法では意味がない。

あのガキがさつきからバカの一つ覚えみたいに使つて反射の魔法で防げるのは最初の一発だけ。

弾くという性質から反射の魔法に重ね掛けはできない、ゆえに必要なときは効果が切れる度に掛け直すのが暗黙の了解になつてゐるが

当然そこに隙ができる。

その隙を狙つて、まさかフレイムドラゴンがあんな手を使つてくるとは・・・

前段階として火の耐性を上げ、対魔法防壁をかけていたとしてもあの数じやあ無理だろうな。

俺は・・・夢を見ているのか？

それとも、まだ酔つているのか？

諦めの視線を向けていた先で、全てのフレイムランスが完全に弾き返されていた。

ありえない。それすらどうか呆然とした頭ではなくわからなかつたが、弾き返されたそれらを順次焼き消したフレイムドラゴンが突然ブチ切れたような咆哮を上げたことで、はつと我に返る。

首だけで後ろを向いたあれが何をしようとしているのか瞬時に察した。

来る。

ドラゴンブレスと呼ばれる、防御魔法無視のタチの悪い一息が。フレイムドラゴンの意識範囲外の距離から遠見の魔法で見ていても寒気がする。

間近でその恐怖に身が竦んだのか、あのガキは微動だにしていない。

そして、一筋の白い閃光が見えた直後、直視できないくらいの光が

微動だにしなかつたあのガキを呑み込んだ。

しばらくして眩しさに顔を背け手を翳していた肌にも、呼吸するのが嫌になるほど熱が襲い掛かる。

骨も残つてねえだろうな・・・そう思い、ある程度治まってからゆつくりと目を開けた先には、どろどろに溶けた大地とその上にぼつんと立つたガキがいた。

どうやつたのかは全く想像もできなかつたが、あのガキは確かにドラゴンプレスを食らつたはずだ。

それも真正面から正々堂々と。

それからしばらく似たようなことを繰り返しているのを観察していつが、やはり種はわからなかつた。

そのうちフレイムドラゴンが地に倒れ伏したことで、この戦いの決着は着いたようだつた。

立ち昇る魔力も感じない。

はつと気づいて、こんな好機見逃せるわけもないと急いで街に戻つて杖を手にとり仲間を集めだが、再び平原に来てみればフレイムドラゴンもあのガキもいなくなつていた。

仲間には酔払いと罵られたが、ただ溶けた大地だけはその存在を証明していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6659m/>

ハルミチル

2010年12月2日21時00分発行